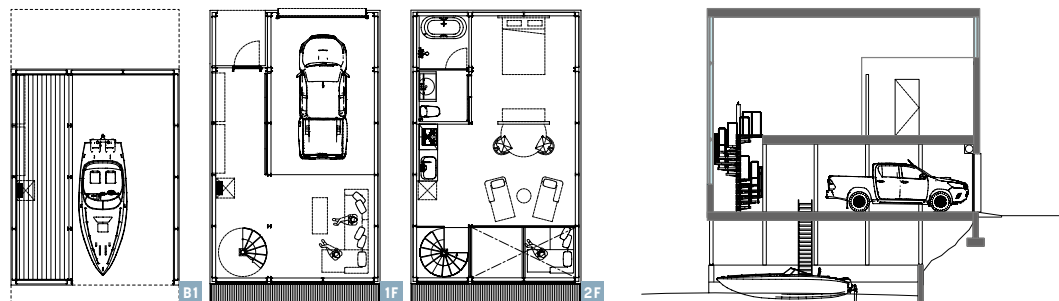


Text/Atsushi TAMADA

FLOOR PLAN

海面、岸部、丘陵、道路、裏山など、海辺の集落特有の地形を利用して、この舟屋は成立しています。海レベルにあるB1の船着き場は、ある意味で高床式の基礎のような役割です。家具や道具を収納するにはあまり適さない場所。舟屋の立地は入り組んだりアス式海岸の静かな入り江がふさわしい。岩礁や小さな半島が、天然の防波堤になっている場所です。



デイトナハウスの モーター&マリンライフのすすめ 21世紀型の“舟屋”を考える

生業(なりわい)が家の形状に反映される、その典型例としての『伊根の舟屋』に倣って、21世紀型のアクティブなライフスタイルを反映した“モーター&マリン型ガレージ住宅”を考えてみました。

デイトナが提案する
新しい建築のカタチ

DH×L
DAYTONA HOUSE×LDK



若狭湾に面した丹後半島の付け根にある京都府伊根町。そこに今でも現役で存在する“舟屋”と呼ばれる住居形式は、自然と共生して生きる人間の“生業(なりわい)”が、住居のカタチに結晶した美しい建築として有名です。静かな湾内の海からこの舟屋を見ると、健気で謙虚な、かつての日本人の自然に対するスタンスをしみじみと感じるのであります。それと同時に仕事の道具としての“移動手段”を住居の中に内包するという形式が、後世の人を引き付ける要因になっていることは間違いないと思います。動と静の一体化。そこにワクワク感を感じずにはいられませんね。

昔から国家側の動機としては、税金を確実に徴収するためには、人々を自由に動き回らせず、むしろ人々を土地に“縛り付ける”という方式を採用していました。しかし舟屋には、どこか国家のそんな発想を揶揄するような、アクティブで自由な印象があり、そこが人気の理由になっているのかもしれない。暗に「俺は動くぞ!」という意思表示を舟屋の佇まいは示しています。そこが魅力ですね。でもそれは、ガレージハウスという現代の住居形式にも共通の事柄かもしれません。ということで今回は、遊びと仕事が一体化するアクティブライフを送る人にご提案する新しい“生業型住居形式”として、21世紀の舟屋をケーススタディしてみました。

海に面して開口部を設けて、いつでも船で海に乗り出すことができるこの家の形状は、伊根町の舟屋をそのまま踏襲しています。違っているのは二つの点。この家の主要構造が“木造”ではなく“鉄

骨造”であること。そしてもうひとつは、この家が陸上の移動手段も内包するガレージハウスでもあることです。

まず、主要構造はデイトナハウスのLGSシステムのスチールフレームで構成します。潮位の変化や台風などの悪天候も想定して、基礎コンクリートを地上2mくらいまで立ち上げ、その上に地下階の軽量鉄骨フレームが緊結されます。塩害による鉄の劣化を懸念して、最上級の亜鉛メッキで保護された鉄骨材は、洗い銀色に輝いています。



裏側の道路に面している1Fはガレージ空間。海に乗り出すだけでなく、陸を駆け回るアクティブ人間のための出撃基地／BASEです。

金曜日に都会の仕事を終え、夜間に愛車を駆ってここに来る。翌朝の船出に備えて、早めに寝てください。静かな入り江の穏やかな波のリズムが、一週間の疲れを吹き飛ばしてくれるでしょう。翌日、早朝からボートに乗り込みエンジンを起動させ、もやい網を投げ込むあなたは、さながら初期の007映画のスペクターなのです。思わず動作も機敏になる。美しい海で十分にクルージングを楽しんで、夕日の中を帰宅します。口を開けて待っている舟屋が見えたときの安心感と満足感。エンジンを低速にして穴に入っていく快楽。この一連のエキサイティングなインプットが、脳細胞を活性化させ、仕事も含めて生活全般が充実していくことでしょう。

これはすでに“趣味”や“余暇”と呼ばれる領域を超えて、生活そのもの、すなわち「21世紀型の生業(なりわい)」と呼んでもいいのかもしれない。

What's DAYTONA HOUSE?

デイトナハウス×LDKの建築システムを構成するのが軽量鉄骨のLGSパネル。厚さ3mm～4mm、幅12.5cm、厚み5cmの「Cチャンネル」と呼ばれる部材を、横幅182cm、縦270cmの長方形に溶接して製作。デイトナハウスは、この基本の形を連結することで、住宅やガレージのみならず、別荘、店舗、賃貸住宅などの様々な建築を作っていく、全く新しい建築のカタチとなっています。パウダーコーティングが施されたその鉄の素材感と、力の伝達を受け持つ「ブレース」が織りなす、インダストリアルで飽きの来ない空間のテイストも持ち味となっています。

LDK inc. 代表 玉田敦士

デイトナをはじめ、カーマガジンでの長期連載、ムック本であるCAR&HOMEにて、常にクルマと住宅の関係について提案し続けてきた建築プロデュース会社LDK inc. 建築設計はもちろんのこと、建築システムの開発や商品開発も行う。

www.daytona-house.com



1 舟屋を特徴づける海に面した“穴倉”。いったいこの高揚感は何? 無理もないのです。幼いころからサンダーボードをはじめとした各種の特撮動画に親しんできたのですから。オイルのにおいが漂う穴倉、まさにリアルな秘密基地なのです。2 海に面した“舟屋”の古い家並のなかで、シャープに存在感を見せながらもすっきりなじむ、軽量鉄骨の新しい舟屋。屋根裏の鉄骨構造体のスケルトン感が気持ちいいのです。3 3Fのリビングルームには余分な虚飾はいらないのです。大開口から四季折々、時間それぞれの海の表情が楽しめる。これこそピクチャーウィンドウです。あとはお気に入りのソファがあれば言うことなしです。4 ガレージのクルマのバックにも思わずくつろげる空間設定をしてしましますね。ここでは愛車がいつも以上に愛おしいのです。





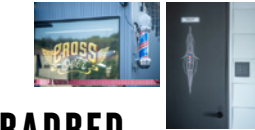
このほど倉敷市内に誕生したバーバー『CROSS OVER』は、アフターコロナ時代の新しい店舗兼住宅の在り方を予感させるものでした。新装した店舗建築は不思議な“新鮮感”に満たされています。奇をてらったデザインをするわけでもなく、大きな看板を派手に光らせるわけでもない。若干29歳のオーナーのコンセプトはシンプルそのものです。「好きなモノに囲まれ、好きな家で生活し、好きな仕事をする」。徹底した“好きなモノコト主義”です。マスタングをイメージした革張りのバーバーチェア。ガラスの向こうはロードランナーが収まるガレージ。理髪する鏡にはその愛着のクルマがいつも映っています。エ

ッジの利いたスチールサッシュのアーリーモダンなイメージもこの施主の好みにマッチしたかもしれません。まるで古き良きアメリカ映画に登場する店舗のようなイメージ。オーナーのディスプレイとセンスによって、千差万別に表情を変える鉄骨空間が、この結晶のような“好きなモノ空間”を成立させているのです。

INFORMATION
CROSS Over
岡山県倉敷市船穂町柳井原2333-7
Instagram @_cross_over_21_



AnchorAntiques Instagram @anchorantiques2016



BARBER

1Fはバーバーエリア。最大のトピックは、ガラス一枚を隔ててロードランナーが格納されたガレージがあること。オーナーは愛車を眺めながら理髪ができる仕組み。当然、ここに訪れるお客さんもクルマ好きが多いとのこと。ハサミ等を入れるツールボックス、バーバーチェア、インダストリアルな照明器具など、オーナーのセンスが溢れる空間となっています。

GRIMB Instagram @grim_b_painter



RESIDENCE AREA

2Fは開放的なリビングとバルコニーを要する居住エリア。グレーの床にアクセントとリズムを与える鉄骨のフレームの素材感。それに差し色的な“暖かさ”を与える木目の壁のコントラスト。絶妙なバランスのキャンパスは、“抑え気味”に表現するのが秘訣です。バルコニーではプールがあったりと、子供もワンちゃんも嬉しい空間になっています。まさに至福の“好きなモノ空間”です。



GARAGE

この白いロードランナーとデイトナハウスの鉄骨フレームがこれほど絶妙な相性の良さを示すことを想像できたのは、世田谷ベースの増築が大好きであったオーナーの「好きなモノ主義」の賜物なのです。歴代でも屈指のベストフォトの一枚。木張りの壁やリベット感がたまらないオリジナルで造作したドアなど、ディテールもすばらしい。



DOGRUN

この素敵なバーバーには愛犬を連れていくこともできるのです。敷地内に柵をめぐらしたドッグランが併設されているからです。犬は縄文時代の昔から人間の友達です。そのやり取りには言葉はいらない。“好きなモノ”には理屈はいらない。少し親和性のある感覚なのです。



21世紀ニッポンを 元気に生きるヒントが ここにある!?

デイトナハウスの ライフスタイル型 店舗建築

アフターコロナの社会の変化を受けて、新しいコンセプトを表現するデイトナハウス仕様の新店舗が全国で増殖中。オーソドックスなのにエッジの利いた存在感がその共通要素。ここから見てくる21世紀ニッポンを元気に生きるキーワードは、“好きなモノを深掘り主義”でした。

アフターコロナの店舗デザインは、21世紀の生き様表明と言えるかもしれません。そんな中、続々と新しいイメージの店舗群がデイトナハウスの鉄骨とともに登場してきました。これらの店舗企画の特長は、従来型の、最大公約数的な遠慮や配慮はむしろ必要なく、自分な好きな世界感をフルスイングで表現していること。そのシャープな表現にむしろ多くの支持者を獲得する予感があるのです。特に地方において、そのような店舗が登場してきたことに嬉しさと可能性を感じます。従来は過度に先鋭的に、尖がることは世間から遊離する心配もありました。しかしSNSの登場や多様化する社会で、尖がっても浮かない、という信頼感が出てきたと言えるでしょう。ビジュアルも含めた表現力次第で、アフターコロナはますます、東京中心ではない地方が面白くなる可能性が大なのです。

すべての価値が一点に集中した20世紀から21世紀は、地方へ再分散する時代。自由で既成の観念に捕らわれない新業態の店舗にとって、デイトナハウスの、ノンデザインのデザイン、鉄骨の素材感を前面に据え、店舗のコンセプトを外部に伝達するに適したシステム&スケルトンの建築が、既成のイメージに拘束されない打ってつけのキャンパスなのかもしれません。ノスタルジックも近未来イメージも等しく受け入れる包容力、それがデイトナハウスの店舗建築の得意とするところなのです。今回ご紹介している店舗建築たちは、施主のコンセプトや作り手のプライドが見事に表現されたものばかり。今後ますます、新しい社会への解釈が深化するほどに、既成のレッテルから自由になった、この新しい、ノンデザインのキャンパスの、ニーズは高まっていくのかもしれない。

好きなモノに囲まれ、好きな家に住み、好きな仕事をする
新時代のコンセプトを体現した店舗兼住宅

CROSS Over

設計・建築 ©DAYTONA HOUSE×LDK KURASHIKI(木村建築)



Text/Atsushi TAMADA

新生ソレイユの丘に誕生した
アウトドアライフを内蔵するスケルトン建築

THE CLIFF

設計・建築
©DAYTONA HOUSE×LDK
SETAGATA(エーディーアンドシー)

横 須賀市の「ソレイユの丘」は、第二次大戦中、海軍の特攻機の出撃する滑走路を戦後公園施設にした場所です。平和への願いを込めて今や神奈川県の子育て世帯であれば誰でも知っている豊かな公園施設になりました。そしてこのほど大人のキャンプ場の要素を加えてフルリニューアル。そのキャンプ場「THE CLIFF」の事務所棟がデイトナハウス建築で作られています。特注寸法の鉄骨パネルを使用して天井の高いガラスの空間を形成。アウトドアのギア類や情報が満載の楽しい場所になっています。



仕事と遊びと仲間のたまり場
新機軸の複合建築

M's OFFICE

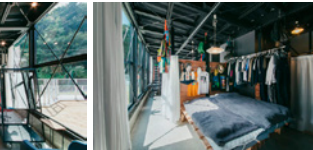
設計・建築 ©DAYTONA HOUSE×LDK
KITAMOTO(Hearts建築工房)

埼 玉県の東浦和市にこのほど完成したこの建物は個人用ですが、やはり複合的な用途を併せ持った、従来のカテゴリーには収まりきれないユニークな建築です。ガレージと事務所、そして遊び(ハンティング)の前線基地として、仲間が集う場所でありつつ、ガレージに格納する愛車での機動性も確保しています。従来の職住一体に遊びの要素が加わり、いわば“遊職住一体”の新しいタイプの建築と言えるでしょう。



K9 MAGNET 平屋を2棟並べた新感覚の職住一体空間

設計・建築 © DAYTONA HOUSE×LDK
HAMAMATSU(バランスデザイン)



ア メリカでは犬と共に暮らす文化が根付いており、「ペットと共に過ごせる空間を自分たちでも作りたい!」という思いからオーナーは、この「K9 MAGNET」をオープン。“ヘアサロンとしての居心地の良さ”+“遊び場としての楽しさ”の二つを提供&実現するコ

ンセプトのもと空間がつくられています。壁一面の窓で開放感たっぷりの室内空間は、特別な間仕切りを設けず、自由なレイアウトが可能。ドッグランも併設されるなど、際だったコンセプトと遊び心に溢れる、まさに21世紀型の職住一体空間と呼ぶに相応しい内容です。



ARMO OFFICE

アルモ社のオフィスエリアは、重量鉄骨で設計されています。ということはこの建物は、デイトナハウスの軽量鉄骨システム工法「LGSシステム」と在来「重量鉄骨構造」のハイブリッド建築。全国でも珍しいケースなのです。重量鉄骨造の社屋にはLGSのスチールサッシをインストール。これによりデイトナハウスらしさをプラスしています。



社屋&デイトナハウス高松のショールームは
“鉄のプロ”が手掛けるハイブリッド店舗建築

DAYTONA HOUSE×LDK
TAKAMATSU SHOWROOM

設計・建築 ©DAYTONA HOUSE×LDK TAKAMATSU(アルモ)

高 松にある(株)アルモ社は、デイトナハウスを香川県で展開する加盟店ですが、建築工事を行う一方で、タワークレーンのオペレーター事業を行っている会社です。従来はタワークレーンの操縦は、オペレーターが現場まで通って、長い梯子を上下移動する

重労働でした。しかし急速なデジタル技術の発達で遠隔操作によるクレーン操縦が可能になったのです。アルモ社はいち早くその操作技術を習得し、遠隔操作センターを建築しました。コックピットからの視界を再現したモニターを見ながら、全国津々浦々の現場のク

レーンを操作します。何とも近未来的な仕事。その近未来感にもスケルトンなデイトナハウス建築がベストフィット。余分な要素や記号性を捨象したシステムとしての機能美が、むしろ新時代の新しいタイプの仕事に似つかわしいのかもしれません。

SHOWROOM

大きなガラスウォールに面したショールームは、デイトナハウス高松のキャラクターを表現する場所として重要な位置づけです。そこには今後マリナなどの海に関連する建築を施工する同社の特長を表現すべく、ジェットスキーやシーカヤックが展示されています。



CRANE ROOM

全国でも珍しいクレーンの遠隔操作ルームです。これこそ今後の日本社会の“テレプレゼンステクノロジー”の進化を先取りした最新の機能です。進化する合理性と人肌の仕事感覚。この両立をデイトナハウスの鉄骨空間で表現しているのです。移動しない分、能動的に移動して楽しむ会社。そのイメージが表現されています。地方から日本全国を相手に仕事をする好例です。

